



第26号

編集発行／碧南市

哲学たいけん村

無我苑

所在地／碧南市坂口町3-100

〒447-0087：TEL. 0566-41-8522

：FAX. 0566-41-7761

梅原猛 名誉村長特別講演会

演題「能と世阿弥」

平成十八年十月二十九日に碧南市芸術文化ホールにて、哲学者で、哲学たいけん村無我苑名誉村長の梅原猛先生の特別講演会が開催されました。特別講演の詳細については、以下の要約をご覧ください。



円空から世阿弥へ

私のいちばんの能力は霊が乗り移ることである。霊が乗り移るといえば甚だ非合理的なように思われるが、真の学問や芸術は自分の力で作り出すものではなく、向こうから何かがやってきて、作者をして作りしめるものである。

三年ほど円空の霊が私に乗り移って『歓喜する円空』という本を書かせたが、本を書き終えるまで霊が出て行かない。やつと昨年未、本を書き終えて霊が出て

行った。半年ほどの空白の後、今度は世阿弥の霊が乗り移ったのである。

能と私

私は『隠された十字架』で聖徳太子の研究をした時、聖徳太子政権の中核で活躍した秦河勝のことを調べた。その時、河勝のことを述べているのが子孫である世阿弥であることに気がついたが、世阿弥に代表される能の研究は、やはり私がどうしてもしなければならぬ研究であったと思われる。

私の日本研究は怨霊という概念を中心に行っている。これまでに聖徳太子、菅原道真、柿本人麻呂等を研究してきたが、世阿弥の能もまさにほとんど怨霊をシテすなわち主人公としている。また、観阿弥・世阿弥の親子は能という日本の悲劇を誕生させたといえる。その劇は歌と舞いと一定の筋をもつストーリーで成り立っている。私が猿之助とともに創造したスーパースタイル歌舞伎はまさに歌舞伎に、近代歌舞伎に失われていた歌と舞の華やかさを加えたものである。伝統歌舞伎のように華麗な歌や舞をもち、そしてシェイクスピアのような人生の洞察を含んだ筋を

もつ悲劇、それが私と猿之助によって作られたスーパースタイル歌舞伎である。いわばわれわれは世阿弥の精神の歌舞伎における復活者なのである。

このようなことから、怨霊の研究者として、歌舞を重んじる悲劇の研究者、創作者として、もつと早く世阿弥研究にかならねばならなかった。特に現代では能は骨董品のように扱われ、世阿弥という作者の思いや人生がおろそかにされているのが残念である。

室町という時代

世阿弥が生きた室町という時代は下剋上の時代といわれる。それは律令体制が崩壊した日本社会の最大の混乱期であるといえる。この室町時代の前に南北朝の時代がある。この南北朝時代の歴史を書いたのが『太平記』であるが、それによると、数十万の人による戦いの時代であり、従来の日本には例のない、戦争の時代であったといえる。そして室町時代の終わりをなすのが応仁の乱であるが、これも南北朝の戦いと同じように何らの理念なき、ルールなき人間の大量殺害の時代であった。

観世家の系譜

現在の能は室町時代より続く観世流、宝生流、金春流、金剛流に江戸時代に生まれた喜多流を加えた五流派があるが、中心はやはり観阿弥、世阿弥の観世流である。

ところで、戦後、「観世福田系図」というものが発見された。それは伊賀の上島家にある系図であるが、そこに驚くべきことが記されている。それは世阿弥の父、観阿弥が楠木正成の甥であり、また世阿弥の嗣子である元雅が將軍義教によって殺されたということである。この系図を歴史家は大変重視しているが、能研究者は採用しようとしていない。しかし私はこの二点は事実である可能性が高いと思う。観阿弥も突然若くして死んだが、彼も殺された可能性が高い。そして元雅も殺され、世阿弥も流罪になった。

能作者の人生及びその作品をこのような時代相の中で考えねばならない。私は観阿弥、世阿弥、元雅、及び世阿弥の婿である金春禅竹もまた天才であったと思う。しかし世阿弥、元雅、禅竹の能は暗い。現在の観世家は世阿弥の弟の音阿弥の系統を受け継ぐものであるが、音阿弥の子に「鞍馬天狗」や「船弁慶」や「安宅」を作った観世小次郎が出て、大衆に歓迎される明るい能を作った。

観阿弥と世阿弥

観阿弥の能はドラマ性が強い。その代

表作が「自然居士」と「卒塔婆小町」であろう。たとえば仏教を民衆に分かりやすく説く「自然居士」は、人買いに売られた娘をいろいろな策略でもって取り戻すという筋である。ヒューマンステイツであり、どのように劇が展開するかまったく分からず、観衆をはらはらせる。それに対して、世阿弥の劇にはそのような劇的要素は少ない。世阿弥が作ったのは複式夢幻能であるといわれる。初めに、多くは諸国一見の僧であるワキが登場し、故人の縁のところに訪れ、そこに出てきた里人に故事を問う。その問いに里人は甚だ詳しく往時のことを語り、なお追及すると、里人は姿を消す。それが前場である。そして前場と後場の間に狂言方が出てきて、この里で語られている昔の話を話す。後場になると、前場において里人に化けていた昔の悲劇の主人公であるシテの霊が登場し、そのときの苦

悩の人生を再現してみせる。ワキは、だんだん凶暴になっていくそのシテの霊を鎮魂する。そしてその鎮魂が成功し、怨霊は夜明けとともに姿を消す。

これが複式夢幻能であるが、世阿弥は二曲三体という理論を立てる。二曲というのは歌と舞であり、三体というのは老体、軍体、女体であるが、それを一番能、二番能、三番能とし、物狂の能である四番能、主に鬼の能である五番能を加える。世阿弥の能は三つの時代に分けられる。義満の時代（全盛時代）、義持の時代（不遇時代）、義教の時代（迫害時代）である。全盛時代に書いたものが「高砂」「老松」「実朝」、不遇時代に書いたものが「清経」「砧」、そして迫害時代に書いたものが「鶴」「蟬丸」「景清」ではないか。私は、この迫害時代にもっともすぐれた世阿弥の能が作られたと思う。



元雅と禅竹

元雅が殺されたのは間違いないと思われる。彼は世阿弥とともに観世大夫の職を音阿弥に譲ろうとする義教の命に従わず、大和南部の越智に逃れた後、後南朝の乱が起こって元雅は殺され、世阿弥は「わが能は失われた」と嘆くが、元雅が殺された翌年、音阿弥の観世大夫就任の能が大々的に行われる。

その翌年、世阿弥は佐渡に流されたが、佐渡で数年暮らした後、義教が殺されたので、彼は再び故郷へ帰ることができたとされる。この晩年の世阿弥の保護者が世阿弥の婿である金春流の家元、禅竹である。禅竹の能はまさに「草木国土悉皆成仏」という思想を劇にしたようなもので、その代表作が「定家」や「杜若」や「芭蕉」である。俳人芭蕉の名はこの禅竹の能「芭蕉」からとられたものであるように思われる。

その後の能

能は秀吉によって大切にされ、秀吉もまた能を作っている。家康も能楽師と親しく、能を保護し、能はそのまま冷凍庫に保存されるように江戸幕府によって厚く保護された。そして今日まで能は室町時代の能がほぼそのまま伝えられている。それはやはり日本文化のエッセンスといつてよい。能研究は今後の私の日本の大きな課題となった。

本の情報

●新潮社

歓喜する円空

梅原 猛著



新しき円空、発見

十二万體におよぶという異形の神仏像を彫った仏師・円空。

謎多き生涯や、創造への歓喜あふれるその芸術性、深く篤い宗教思想を読み解きながら、円空を日本文化史上の重要人物として大胆に位置づける、渾身の力作。



哲学講座を終えて

前期哲学講座「鬼(おに)の研究」

平成十八年五月二十七日～六月十七日

- ① 鬼の出現
 - ② 鬼の民俗学
 - ③ 鬼の文学史
 - ④ 心に棲む鬼
- 講師 久野昭氏・天野雅郎氏
受講者 三十名

〈受講者の感想〉

鬼がテーマの講義でしたが、人が長い歳月受け継いできた言葉。今もつて解くことができないものがあるということを知りました。必ずしも答えのない講義ははじめて経験しました。

鬼は人間のあらゆる場面に出てくる。「鬼子」からはじまり、「鬼ババ」と母をよび、「鬼の居ぬまに：」とあらゆる場面に。自然の中、生活の中にとこんな

にも関わっているとは思いませんでした。生活環境が電気というものによって現実にならない「鬼」が身のまわりから遠ざかり、昔のように少し暗いところでは「鬼」がでそうな場所もなくなった気がしました。



後期哲学講座「ニヒリズム」

平成十八年十一月十一日～二十五日

- ① 思想状況としてのニヒリズム
 - ② ニヒリズムの基本的構造
 - ③ ニヒリズムからの脱却
- 講師 久野昭氏
受講者 二十一名

〈受講者の感想〉

ニヒリズムという言葉はよく聞くのですが、本質的な意味と歴史的な考えの系統的理解をしていなかったが、先生の話と歴史的背景と多くの人々の考えの追求について学ぶことができ、さらに自分なりに関係する図書を読んでもう一歩前に進んでいきたいと思えます。

哲学入門講座

「いのち」の哲学への入門

平成十九年二月三日～二十四日

- ① 生と死
 - ② いのりの哲学
 - ③ 死の弁証法
- 講師 小川侃氏・宮原勇氏
受講者 三十三名

〈受講者の感想〉

土曜日の午後二時という時間がとても参加しやすかった。無我苑での講座の雰囲気も心地よく、日常生活から全く別の世界に身を置く有意義な時間となった。今回、「死」をとりあげていたが、仏教など宗教哲学という方向から講義をお聞きし、とても興味深かった。仏教をもう一度再確認し、勉強しながらその世界観の奥の深さに感嘆した。また、先生の「インドの旅」のエピソードはすごく楽しかった。

本の情報

●晃洋書房

環境と身の現象学

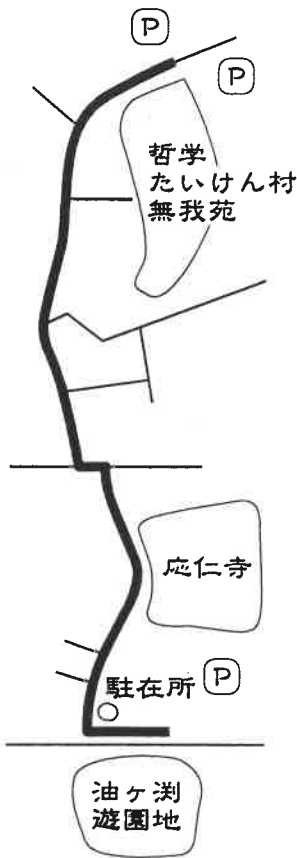
— 環境哲学入門 —

小川 侃著

哲学の小径

哲学たいけん村無我苑と県下最大規模の自然湖沼「油ヶ淵」の湖畔にある「花しようぶ園」、蓮如上人ゆかりの寺「応仁寺」を結ぶ哲学の小径。応仁寺、油ヶ淵などの歴史や文化を感じる案内や哲学的な言葉、俳句など文学を掲示するサインが各所に置かれています。また、六月の花しようぶまつりが開催される時期には哲学の小径を散策しながらの吟行俳句大会を計画しております。

穏やかな春の季節や初夏の花しようぶが咲き乱れる頃に、哲学たいけん村無我苑、応仁寺、花しようぶ園付近の散策にお出かけください。



平成19年度 涛々庵茶会・三曲演奏予定表

月日	涛々庵茶会		三曲演奏
	席主	流派	出演団体
平成19年 4月22日	杉浦 伸子 (宗伸)	裏千家	絲音の会・竹秀会
5月27日	安形 亮照 (宗照)	裏千家	祥友会・竹秀会
6月24日	高山 恵子 (宗恵)	表千家	若草会・竹秀会
7月22日	杉浦みどり (宗翠)	裏千家	絲音の会・竹秀会
8月26日	杉浦 時子 (宗時)	宗徧流	祥友会・竹秀会
9月23日	小島 和美 (宗美)	裏千家	若草会・竹秀会
10月28日	沢田 教子 (宗教)	表千家	祥友会・竹秀会
11月25日	小沢わさ子 (宗和)	松尾流	絲音の会・竹秀会
12月16日	磯貝 勝代 (宗代)	裏千家	若草会・竹秀会
平成20年 1月27日	小笠原芙美 (宗文)	久田流	絲音の会・竹秀会
2月24日	山田 昇 (宗昇)	裏千家	祥友会・竹秀会
3月23日	杉浦 とめ (宗登)	久田流	若草会・竹秀会

お知らせ

涛々庵茶会・三曲演奏

涛々庵茶会は毎月それぞれの席主の創意工夫がなされ、華やかな茶会となっております。また、茶会に華を添える「琴

・三弦・尺八」による三曲の演奏も安吾館にて行っております。

涛々庵茶会は、毎月第四日曜日(十二月のみ第三日曜日)に行います。料金は一服四百円、時間は各日とも十時から十五時まで(立札茶席は十六時まで)です。また、三曲の演奏はお茶会にあわせ随時行っておりますので、ぜひお越しください。